

### 3 キャリア教育の目標

キャリア教育は、その定義にあるように、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促すことを目指す教育活動である。それぞれの中学校におけるキャリア教育の目標設定に当たっては、この定義を踏まえるとともに、「基礎的・汎用的能力」の育成に十分配慮しつつ、地域、学校の特色や生徒の実態に即して、入学から卒業までの3年間を通してどのような力を育成するのかを具体的に定めることが重要である。

またキャリア教育は、一人一人のキャリアが多様な側面を持ちながら段階をおって発達していくことを改めて深く認識し、子どもたちがそれぞれの発達の段階に応じ、自分自身と働くこととを適切に関係付け、それぞれの発達の段階における発達課題を解決できるよう取組を展開するところに特質がある。各学校においては、中学校段階のキャリア発達段階と発達課題の特質を踏まえた目標の設定に十分配慮しなければならない。

#### (1) 中学校3年間を見通した目標設定

中学校は、「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すこと」(学校教育法第45条)を目的としている。この時期は、自我の目覚めや、独立の欲求が高まるとともに、人間関係も広がり、社会の一員としての自分の役割や責任の自覚が芽生えてくる時期である。また、他者とかわり、様々な葛藤や経験の中で、自らの人生や生き方への関心が高まり、自分の生き方を模索し、夢や理想を持つ時期である。一方で、高等学校入学者選抜をはじめとする現実的な進路の選択を迫られ、自分の意志と責任で決定しなければならない時期でもある。このように、中学校の段階はキャリア教育実践にとって極めて重要である。

これを踏まえ、中学校段階では、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかりと考えさせるとともに、目標を立てて計画的に取り組む態度の育成等について、体験を通じて理解を深めさせ、進路の選択・決定へと導くことが重要である。

このため、各学校においては、キャリア教育の視点で、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動や日常生活におけるそれぞれの活動を体系的に位置付けることにより、能力や態度の効果的な育成を図ることが必要である。

このように、中学生にとって計画的・系統的なキャリア教育は極めて重要であり、中学生のキャリア発達課題に即した目標設定が求められる。

中学校段階でのキャリア発達課題		
<ul style="list-style-type: none"> <li>○キャリア発達段階 ⇒現実的探索と暫定的選択の時期</li> <li>○キャリア発達課題               <ul style="list-style-type: none"> <li>・肯定的自己理解と自己有用感の獲得</li> <li>・興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成</li> <li>・進路計画の立案と暫定的選択</li> <li>・生き方や進路に関する現実的探索</li> </ul> </li> </ul>		
各学年におけるキャリア発達課題の例		
1年生	2年生	3年生
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の良さや個性が分かる。</li> <li>・自己と他者の違いに気付き、尊重しようとする。</li> <li>・集団の一員としての役割を理解し、それを果たそうとする。</li> <li>・将来に対する漠然とした夢やあこがれを抱く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の言動が他者に及ぼす影響について理解する。</li> <li>・社会の一員としての自覚が芽生えるとともに、社会や大人を客観的にとらえる。</li> <li>・将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し、模索する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己と他者の個性を尊重し、人間関係を円滑に進める。</li> <li>・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。</li> <li>・将来設計を達成するための困難を理解し、それを克服するための努力に向かう。</li> </ul>

(文部科学省『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』(平成18年11月)をもとに作成)

更に、前頁に整理した中学生のキャリア発達段階をより深く理解し、系統性のある指導につなげるためには、次の表に示された「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達」が参考となる。このような長期的視点から、子どもたちの発達を理解し、学校間連携につなげていくことが大切である。

職場における体験的な学習を一例とした場合、中学生の時期に行う職場体験活動は、ある職業や仕事を暫定的な窓口としながら職業や仕事を知ると同時に、働く人の実際の生活に触れて社会の現実に向ることが中心的な課題となると考えられる。また、このような中学生の体験を踏まえて行う高等学校等の生徒による就業体験活動は、将来進む可能性のある仕事や職業に関連する活動をいわば試行的に体験することにより、それを手掛かりに社会人・職業人への移行準備を行うことが、中心的な課題となると言えよう。

### 小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達

就学前	小学生	中学生	高校生	大学・専門学校・社会人
	<b>進路の探索・ 選択にかかる基盤形成の時期</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己及び他者への積極的関心の形成・発展</li> <li>身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上</li> <li>夢や希望、憧れる自己のイメージの獲得</li> <li>勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成</li> </ul>	<b>現実的探索と 暫定的選択の時期</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>肯定的自己理解と自己有用感の獲得</li> <li>興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成</li> <li>進路計画の立案と暫定的選択</li> <li>生き方や進路に関する現実的探索</li> </ul>	<b>現実的探索・試行と 社会的移行準備の時期</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己理解の深化と自己受容</li> <li>選択基準としての勤労観・職業観の確立</li> <li>将来設計の立案と社会的移行の準備</li> <li>進路の現実吟味と試行的参加</li> </ul>	

(文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」(平成18年11月)をもとに作成)

## (2) キャリア発達を踏まえた目標設定

既に述べたように、思春期を迎えた子どもたちの中学校3年間における心身の発達は著しく、多様な面での成長や変化をみることができると言える。生徒は自己の個性、能力、適性の理解を深めながら、新たに将来への道を歩み始める。また、興味・関心が自己から他者、そして社会認識へと広がる途上にあり、自己と他者や社会との適切な関係を構築していく力を身に付けていく時期である。

中学校では、新しい集団の中で、教科担任制をはじめとして、小学校とは大きく異なる学校生活が始まる。特に中学1年時には、初めて取り組む教科や定期考査、部活動など、生徒は急激な環境の変化の中に身を置くことになる。また、学校行事や生徒会活動などにおいても、係や委員会など責任を持って一定の役割を担う体験の機会が増し、それに伴って人間関係の輪が拡大する。そのため、時に集団への不適応やコミュニケーションにかかる苦手意識等の悩みが多くなる時期である。人間関係の形成は、社会とのかかわりの中で生活し、仕事をしていく上で基礎となるものである。特に、価値の多様化が進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等の多様な人材が活躍しており、様々な他者を認めつつ、それらと協働していく力が必要である。小学校における人間関係との大きな違いに戸惑い、人間関係形成上の悩みも多くなる時期だからこそ、生徒たちの学校生活での体験やそこでの実感を生かしたキャリア教育が期待されると言えよう。

このように、生徒たちの実体験を通じた迷いや気づきを、将来につなげて改めて認識させることは

極めて重要である。

例えば、キャリアを積み上げていく過程においては、目標とする進路が達成できない場合や、途中で変更せざるを得ない場合が多々あるにもかかわらず、社会・経済・雇用の仕組みについての知識や、様々な状況に対処する方法を十分に身に付けていない若者が多いと指摘されている。このため、今日の社会が分業によって相互に支え合って成り立っているといった社会・経済・雇用などの基本的な仕組みについての知識や、税金・社会保険・年金や労働者としての権利・義務などの社会人・職業人として必要な知識、男女共同参画社会の意義や、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の重要性など、キャリアを積み上げていく上で最低限必要な知識について、自らの将来にかかわることとして理解させることが必要である。特に中学校段階では、知識として学ぶことと体験を通して学ぶことの両面から、現実社会の厳しさも含めて伝えることが求められる。職場体験活動などは、その機会として極めて重要である。その際、これらの知識や体験が、生徒自らの将来と関係するのだということを実感できるよう、生徒の発達の段階を十分考慮した目標の設定と指導上の配慮が必要なことは言うまでもない。

また、学校での学習が自分の将来を築いてくれるという意義が見いだせずに、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった状況が見られると指摘される今日、生徒自らが日常的な学習や活動について、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それらを適切に結びつけたりしながら、より深い理解へと導くような取組も併せて必要である。例えば1年生では、将来の職業生活との関連の中で今の学習の必要性や大切さを理解しようとすることや、学習の過程を振り返り次の選択場面に生かそうとすること、2年生では、様々な体験等を通して勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かることや、よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見いだしていくことの大切さを理解すること、3年生では、係・委員会活動や職場体験活動等で得たことを以後の学習や選択に生かそうとすることや、新たな課題に積極的に取り組み主体的に解決していこうとすることなど、それぞれの発達の段階に応じた目標を設定することができよう。

前項に掲げた表が示すように、中学校段階では、「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」「興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成」「進路計画の立案と暫定的選択」「生き方や進路に関する現実的探索」が中心的なキャリア発達課題となり、それぞれの中学校においても、これを軸としながら「基礎的・汎用的能力」の育成に当たることとなる。その際、これまで繰り返し指摘してきたように、具体的な目標設定に当たっては、地域、学校の特色や生徒の実態を踏まえて検討することが求められる。教師一人一人の目で確認した実態や、各種の調査などを通して明らかとなった特質などを基に、目指す生徒像を明確にし、キャリア教育で養うべき資質・能力・態度を目標に明示することが大切である。さらに、それらの目標を達成するために、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動という教育活動ごとに指導すべき事項を分類・整理し、キャリア教育の全体計画にそれらを記述するとともにそれぞれの年間指導計画にもそれらを組み込み、横断的・計画的に指導できるようにする必要がある。

キャリア教育の全体図



現実的探索・試行と社会的移行準備

高等学校におけるキャリア教育の目標

- 自己理解の深化と自己受容
- 選択基準としての職業観・勤労観の確立
- 将来設計の立案と社会的移行の準備
- 進路の現実吟味と試行的参加

現実的探索と暫定的選択

中学校におけるキャリア教育の目標

- 肯定的自己理解と自己有用感の獲得
- 興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成
- 進路計画の立案と暫定的選択
- 生き方や進路に関する現実的探索

進路の探索・選択にかかる基盤形成

小学校におけるキャリア教育の目標

- 自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上
- 夢や希望、憧れる自己のイメージの獲得
- 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成

## 4 キャリア教育に期待されること

平成20年3月に公示された中学校学習指導要領は21世紀を知識基盤社会であるとし、「生きる力」はますます重要との認識のもと、その理念を継承することとした。

キャリア教育には、「生きる力」を身に付けさせるという時代の要請にこたえつつ、子どもたちが力強く生きていくために必要な資質や能力を育てていくという重要な役割が期待されている。

### (1) 「生きる力」の理念を実現する視点から

平成20年1月の中央教育審議会答申では、「生きる力」という目標を関係者で共有するため重視する視点として、次のような内容が指摘されている。

- ・将来の職業や生活を見通して、社会のために自立的に生きるために必要とされる力が「生きる力」であり、進路決定において子どもたちの希望を成就させるだけではない。
- ・変化の激しい社会で自立的に生きるためには、思考力・判断力・表現力等をはぐくみ、知識や技能を活用できる能力を育てる必要がある。
- ・自分に自信をもたせ、将来や人間関係に不安を抱えている子どもたちの、豊かなコミュニケーション能力や感性・情緒・知的活動の基盤である言語能力などを高める必要がある。

これら3点は、すべてキャリア教育の目的とも深い関係があり、キャリア教育を推進することによって、より高められるものであると言えよう。

### (2) いわゆる「PISA型学力」の視点から

OECDが2000(平成12)年から実施しているPISA(Programme for International Student Assessment)は、社会に積極的に参加することができるような実用的な知識・技能に焦点を当て、生徒が将来の生活で直面する課題に対してどの程度準備できているかを「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の3分野を中心に測定しようとするものである。PISAにおけるそれぞれの設問の内容は、各分野の学習の意義を自らの将来と関係づけて理解させる上で極めて示唆的であり、それらを通して測定される能力(いわゆる「PISA型学力」)はキャリア教育で育成しようとしている能力と関連が深い。

#### 読解力

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

#### 数学的リテラシー

数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠にもとづき判断を行い、数学に携わる能力。

#### 科学的リテラシー

疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とその活用、及び科学の特徴的な諸側面を人間の知識と探究の一形態として理解すること、及び科学と技術(テクノロジー)が我々の物質的、知的、文化的環境をいかに形作っているかを認識すること、並びに思慮深い一市民として、科学的な考えを持ち、科学が関連する諸問題に、自ら進んで関わること。

国立教育政策研究所監訳『PISA2006年調査 評価の枠組み』ぎょうせい 平成19年

### (3) 言語活動の充実という視点から

考えや思いの異なる多様な人々の集合体としての社会において、言語活動はコミュニケーションの最も基盤となるものである。平成20年1月の中央教育審議会答申では、コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関して、「討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする」などの重要性が記されている。こうしたことから、言語活動は単に知的活動(論理や思考)というだけではなく、自分の考えや思いを相手に適切に伝え、かつ、相手の考えや思いを正確に理解するという相互交流を、言語を通して行うことで相互の目的を達成していく行為であると言える。

キャリア教育が目指す「人間関係形成・社会能力の育成」のための「社会人との対話」や「体験活動」などの実践は、多様な人々との言語活動を通してコミュニケーション能力を育成することにつながる。したがって、このようなキャリア教育の取組は、言語活動を充実させることになる。

## 5 キャリア教育の意義

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日)は、「キャリア教育は、キャリアが子ども・若者の発達の段階やその発達の課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である」とした上で、キャリア教育に取り組む意義について3点に整理し、次のように述べている。

- 第一に、キャリア教育は、一人一人のキャリアの発達や個人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。各学校が、この視点に立って教育の在り方を幅広く見直すことにより、教職員に教育の理念と進むべき方向が共有されると共に、教育課程の改善が促進される。
- 第二に、キャリア教育は、将来、社会人・職業人として自立していくために発達させるべき能力や態度があるという前提にたって、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。このような視点に立って教育活動を展開することにより、学校教育が目指す全人的成長・発達を促すことができる。
- 第三に、キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結びつけることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。このような取組を進めることを通じて、学校教育が抱える様々な課題への対処に活路を開くことにもつながるものと考えられる。

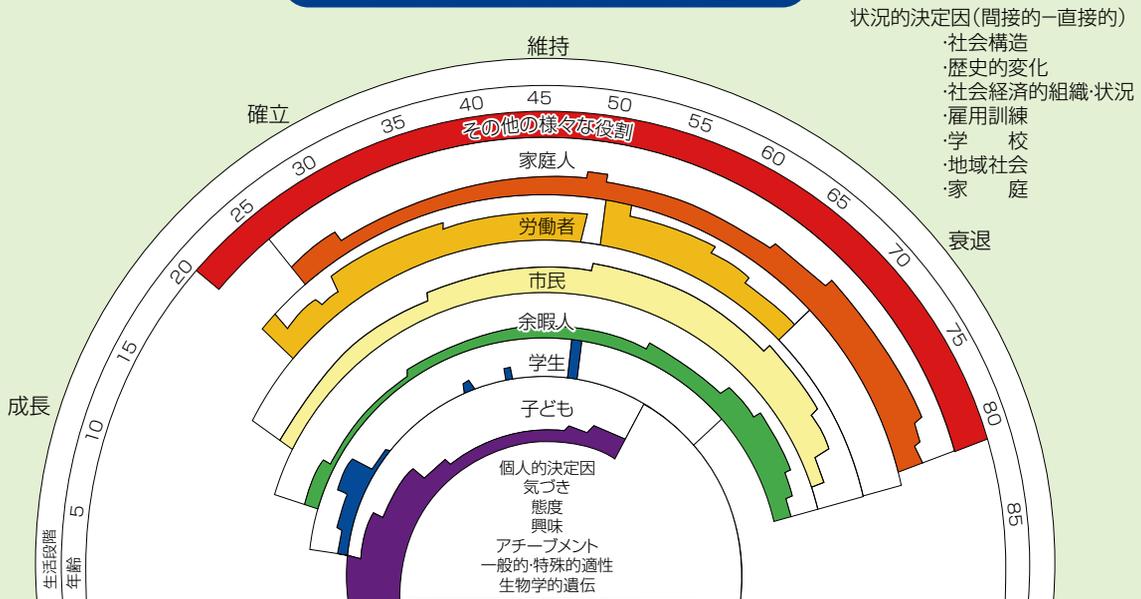
(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))



「キャリア発達」についても少し詳しく

人は誕生から乳幼児期，青年期，成人期，そして老年期を通して，その時期にふさわしい適応能力，つまり自分を取りまく環境(例えば，身近な人や所属する集団など)に応じて自分の行動や考え方を変容させたり，環境に働きかけてより良い状態を形成する能力を身に付けていきます。その中で，社会との相互関係を保ちつつ自分らしい生き方を展望し，実現していく過程がキャリア発達です。社会との相互関係を保つとは，言い換えれば，社会における自己の立場に応じた役割を果たすということです。人は生涯の中で，様々な役割をすべて同じように果たすのではなく，その時々の方の自分にとっての重要性や意味に応じて，それらの役割を果たしていこうとします。それが「自分らしい生き方」です。また，社会における自己の立場に応じた役割を果たすことを通して「自分と働くこと」との関係付けや「価値観」が形成されます。D.E.スーパーは，この過程を生涯における役割(ライフ・ロール)の分化と統合の過程として示しています。

ライフ・キャリアの虹



— ある男のライフ・キャリア —

「22歳で大学を卒業し，すぐに就職。26歳で結婚して，27歳で1児の父親となる。47歳の時に1年間社外研修。57歳で両親を失い，67歳で退職。78歳の時妻を失い81歳で生涯を終えた。」D.E.スーパーはこのようなライフ・キャリアを概念図化した。

出典 文部省『中学校・高等学校進路指導資料第1分冊』平成4年

「自分に期待される複数の役割を統合して自分らしい生き方を展望し実現していく」ということを，上図の「ライフ・キャリアの虹」に即して見ていくとどうなるのでしょうか。図を見ると，例えば15歳の時点での役割は「子ども」と「学生」と「余暇人」です(それ以外の役割もあり得ます)が，重要なのは，その「子ども」，「学生」，「余暇人」の内容です。「子ども」として期待される役割の内容，「学生」として期待される内容，「余暇人」としての遊びや趣味の活動，それらにいかに関与してきたのか。それを通して自分らしさがいかに認識され，それに基づいて将来の役割(進路)をいかに選択し，取り組んでいこうとするのかが，この時点でのキャリア発達の姿です。つまり，この時点でいかなる「キャリア」が形成され，いかなるキャリアが展望されているかがとらえられるのです。このようなキャリア発達の課題を達成していくためには，社会認識と自己認識を結合させて自己を方向付けることが必要です。